

ギュスターヴ・フローベール研究(2)

大 貫 徹

外国語教室

(1991年8月29日受理)

Une Etude sur Gustave Flaubert (2)

Tohru OHNUKI

Department of Foreign Languages

(Received August 29, 1991)

Comme on le sait bien, Emma Bovary, héroïne de *Madame Bovary*, refuse certainement le réel, mais elle est trop profondément attirée par lui pour vivre en pure gratuité dans le monde de son imagination. Effectivement, elle ne peut pas vivre ses amours comme de vraies amours livresques: toujours elle doute, s'inquiète, elle essaie de se rassurer sur la réalité de son rêve, et elle tâche de le vérifier dans la vie. Bref, elle fait des expériences. Ces expériences, c'est dommage, finissent mal, et elle éprouve de grandes désillusions. C'est en somme pour ne pas avoir complètement cru à sa rêverie romanesque qu'elle, toute désespérée, s'est finalement tuée.

D'autre part, Don Quichotte, héros favori de Flaubert, ne doute pas que les moulins à vent ne soient de vrais géants: il ne fait pas d'expérience, il n'éprouve pas de désillusion. Bien contrairement à ce que l'on imagine, Emma n'est pas une autre Don Quichotte.

C'est ainsi qu'il faudrait voir en *Madame Bovary* bien moins le procès de l'illusion romanesque (don-quichottesque) que celui d'un romanesque incapable de soutenir jusqu'au bout ses illusions. Dans cette étude, nous allons tenter de mettre en évidence cet aspect de ce roman, en examinant minutieusement le rêve d'Emma.

当論文は、名古屋工業大学学報第40巻(1988年)に掲載されたギュスターヴ・フローベール研究(1)に続くものであり、筆者のフローベール論全体の第一章第一節に当たるものである。

序 論 (名古屋工業大学学報第40巻に掲載)

第一章 『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*) 論

—エンマ・ボヴァリーの夢の自己崩壊性—

第一節 エンマの夢がもつ意味 (本号)

第二節 エンマの悲劇 (以下、次号)

—空虚な夢と充実した夢—

第三節 エンマの生涯

—自己埋没への軌跡—

* *

第一章 『ボヴァリー夫人』(*Madame Bovary*) 論

—エンマ・ボヴァリーの夢の自己崩壊性—

ギュスターヴ・フローベール (Gustave Flaubert) の名を一躍世間に広めさせたこの作品 (1856年発表) に

関して、これまで数多くのことが言われてきた。当論文では、夢と現実との軋轢から自殺したと一般的に言われている女主人公エンマ・ボヴァリー (Emma Bovary) の姿に焦点を絞り、彼女の夢¹⁾が現実との摩擦からではなく、むしろそれ自体で必然的に崩壊する運命にあり、こうした夢の特殊性が結局は彼女を自殺に導いていったのではないかという点を三節にわたって明らかにしてゆきたい。

尚、この作品からの引用は、特に断らない限り、以下のテキストからである。本文中では引用箇所のページ数のみを記すものとする。

Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, édition établie et présentée par Claudine Gothot-Mersch, Garnier, 《Classiques Garnier》, 1971. ただし、日本語にするにあたっては、『ボヴァリー夫人』(伊吹武彦訳)、[全2冊]、岩波文庫、1960年を参照したが、必ずしもそれに全面的に従ったわけではない。

第一節 エンマの夢がもつ意味

A. エンマの基本的な姿勢

Nous étions à l'Etude, quand le Proviseur entra, suivi d'un *nouveau* habillé en bourgeois et d'un garçon de classe qui portait un grand pupitre. (p.3)

「私たちが自習室で勉強していると、そこへ校長が、平服を着た『新入』と、大きな机をかついだ小使を連れて入ってきた。」

ここに引用した作品冒頭の有名な一節と共に、後にエンマの夫となる、少年時代のシャルル(Charles)が登場し、このシャルルの視点から、彼が成長し、医者となり、そして最初の結婚(年上の女性エロイズとの結婚)を経て、エンマと結婚するまでのことが数章にわたって語られたのちに、語り手はやっとエンマの心の中に入り込むことになる。したがって、私たちはその時になって初めて、シャルルの目を通して眺められたエンマの姿ではなく、彼女の心の中に生起するものをじかに知ることになるわけだが、その箇所は次のように語られている。

Avant qu'elle se mariât, elle avait cru avoir de l'amour; mais le bonheur qui aurait dû résulter de cet amour n'étant pas venu, il fallait qu'elle se fût trompée, songeait-elle. (p.36)

「結婚するまで、エンマは恋をしているものと信じていた。しかし、その恋から当然くるはずの幸福がないのは、自分の思い違いだったに相違ないと考えた。」

この一節の中で、エンマが、何よりも先ず、「当然くるはずの幸福がない」存在として提示されていることに私たちは注目したい。というのも、ここから、以下の引用に代表されるような、「(当然くるはずの)何かをたえず待っている」というエンマの欲望の基本的姿勢²⁾とでもいうべき状態が生じてくるからだ。

Au fond de son âme, cependant, elle attendait un événement. Comme les matelots en détresse, elle promenait sur la solitude de sa vie des yeux désespérés, cherchant au loin quelque voile blanche dans les brumes de l'horizon. (p.64)

(c'est nous qui soulignons)

「しかし、心の底では、彼女は出来事を待ち望んでいた。難破した水夫のように、彼女は生活の孤独の上に絶望の眼をやり、はるか水平線の濃霧の中に白帆の影を探し求めた。」(傍点筆者)

しかし、奇妙なことに、エンマはそれを自らすすんで求めようとはしない。ただひたすら「はるかかなた」から(当然くるはずの)何かがやって来るのを待つばかりである。そして、今日それが来なければ、明日こそはそれがやって来るはずだと期待して、明日という日を待つ。つまり、エンマは(一般的な印象とは異なり)徹底して受動的な存在なのだ。

[...] chaque matin, à son réveil, elle l'espérait pour la journée, et elle écoutait tous les bruits, se levait en sursaut, s'étonnait qu'il ne vînt pas; puis, au coucher du soleil, toujours plus triste, désirait être au lendemain. (p.64)

「毎朝眼を覚ますと、今日じゅうにはきっと何かがやってくるに思われた。そして、あらゆる物音に耳を澄まし、跳ね起きては、それが来ないのに驚いた。やがて、日暮れになるといよいよわびしくて、明日の日を待った。」

こうしたエンマの姿が典型的に現れている箇所は、ヴォービュサル(Vaubysard)での舞踏会への招待を巡る一連の日々の場合である。

シャルルとの結婚によって、エンマは生活に新たな刺激を得たが、次第にその刺激も薄らぎ、

[...] elle [=Emma] ne pouvait s'imaginer à présent que ce calme où elle vivait fût le bonheur qu'elle avait rêvé. [...] Emma se répétait:

—Pourquoi, mon Dieu! me suis-je mariée? (p.41-46)

「(結婚した)今となつては、エンマは、自分の生活のこの穏やかさが、昔憧れていたあの幸福であろうとは思えなかった。(…)エンマは繰り返した。

『ああ、なぜ結婚なんかしたんだろう』

と、ただ嘆くばかりの毎日であり、何かがやって来るのをじっと待つばかりの受動的な日々であった時、

Mais, vers la fin de septembre, quelque chose d'extraordinaire tomba dans sa vie [...] (p.47)

「ところが、九月の末頃、ある異常な出来事が彼女の生活に降ってわいた。」

つまり、ヴォービュサルにあるダンデルヴィリエ侯爵(marquis d'Andervilliers)の屋敷での舞踏会に突然招待されたのである。上に引用した文は、この舞踏会から戻った直後に記された以下の一節、すなわち、

Son voyage à la Vaubyessard avait fait un trou dans sa vie, à la manière de ces grandes crevasse qu'un orage, en une seule nuit, creuse quelquefois dans les montagnes. (p.58)

「ヴォービュサルへの旅は、ちょうど暴風雨がよく一夜のうちに山に大きな裂け目をこしらえるように、彼女の生活の中に穴をあけてしまった。」

という一節と呼応することで、この出来事がエンマの生活にきわめて大きな影響を及ぼした様子をはっきりと示しているのであるが、ここでは、この出来事に「ある異常な」とか「暴風雨が (...) ように」とかの修飾語が添えられることで、この招待事件が、エンマにとって、思いもよらぬ所から不意に到来したものであるということを明確に示している点に注意したい。

そもそも、受身的な存在であるエンマにおいて、事件というものは、彼女が自ら探し求めて出会うものではない。それは、不意に向う側から唐突に訪れてくるものである。著名な批評家ジョルジュ・プーレ (Georges Poulet) の美しい比喩を借りて言えば、「事件そのものはなんでもない。投げ込まれたものは一片の石に過ぎないのだ。(中略)それは、望まれることもなく、招かれることもなく、偶然に、単なる環境の戯れによって外部からやって来るのだ。」⁹⁾

だから、ある出来事が到来した後は、それを積極的に利用して何か新たな試みに能動的に向かうのではなく、例えば、《ce fut [...] une occupation pour Emma que le souvenir de ce bal》(p.58)「あの舞踏会を追憶することがエンマにとっては一つの仕事となった」というように、ただひたすら、それを受動的に反芻する日々があるだけであり、もし、何らかの事件が再びやってくるという兆しを失えば、それ以後は、空しく待つばかりの、いわば無意味な時間の連続となるであろう。これが、舞踏会招待の後にエンマの身に生じたことである。

Dès le commencement de juillet, elle comptait sur ses doigts combien de semaines lui restaient pour arriver au mois d'octobre. [...] Mais tout septembre s'écoula sans lettres ni visites. [...] alors la série des mêmes journées recommença.

Elles allaient donc maintenant se suivre ainsi à la file, toujours pareilles, innombrables, et n'apportant rien! [...] pour elle, rien n'arrivait [...] L'avenir était un corridor tout noir, et qui avait au fond sa porte bien fermée. (p.64-65)

「七月の始めから、エンマは十月になるまで何週間あるか指折り数えた。(…)しかし、九月は手紙も人の訪れ

もなく経ってしまった。(…) こうして、またぞろ同じ日々の連続が始まった。

ではこれからは、その日その日がいつも同じように数限りなく、何物ももたらさず、こうして次々に続いて行くのか。(…) 自分には何も起こらない。(…) 未来は真っ暗な一筋の廊下だ、そしてその奥には戸がびったりと閉まっている。」

B. 「はるかかなた」にあるパリへの夢

ところで、この舞踏会がエンマにもたらした最大のものは、そこでたまたま出会った「子爵」¹⁰⁾の姿とその帰り道に偶然に拾った絹の葉巻入れを通して、彼女の心の奥深くまで入ってきた「パリへの夢」であろう。その夢は次のように語られる。

Elle [=Emma] était à Tostes. Lui [=Le Vicomte], il était à Paris, maintenant; là-bas! Comment était ce Paris? Quel nom démesuré! Elle se le répétait à demi-voix, pour se faire plaisir; il sonnait à ses oreilles comme un bourdon de cathédrale [...] (p.59)

「彼女(エンマ)はトストにいる。彼(子爵)はいまパリにいる。遠いパリに! パリとはいったいどんな所だろう。パリ! なんと大きな感じのする名! 彼女はその名を小声に繰り返しては楽しんだ。それは伽藍の大釣鐘のように彼女の耳に鳴りひびいた。」

エンマにとって、この引用文からも明らかなように、パリという土地は、かつてそこに住んだことがあるというような、自分の身近にある具体的な場所などではない。はるかかなたに、いわば幻のように存在しているものである。というのも、エンマは、ある時、パリに行く人々の後を実際に(空想の中で)追おうとしたことがあるのだが、途中で意識が朦朧としてしまい、どうしてもそれより先には進めないからである。

Et elle les [=les mareyeurs] suivait dans sa pensée, montant et descendant les côtes, traversant les villages, filant sur la grande route à la clarté des étoiles. Au bout d'une distance indéterminée, il se trouvait toujours une place confuse où expirait son rêve. (p.59) (c'est nous qui soulignons)

「そして、エンマは、空想の中でその人たち(魚屋たち)の後を追ひ、丘を上っては降り、村々を横切り、星明かりのもとに街道筋を走って行った。ある距離まで行くと、いつも朦朧とした場所があつて、そこでエンマの夢は果てるのであつた。」(傍点筆者)

このように、エンマの意識がまったく届かない、「はるかかなた」にあるからこそ、パリという土地には、まさしく、エンマの周囲にはない幸福や情熱が溢れるように存在していると思うのである。つまり、隔たりの意識を介在させた「はるかかなたにある」ということが、エンマの「パリへの夢」をその本質的な部分で支えているのである。

F. ガヤール (Françoise Gaillard) は、エンマにとって、「他の場所 (l'ailleurs) だけが彼女の夢を支える唯一のもの」であると断ってから、「根本的に他者である他の場所」としてのエンマのパリとは、言うまでもなく、具体的な現実のパリではなく、そこではあらゆる欲望が充足され、「都会」という言葉が通常想像させるあらゆる夢が存在している場所、いわば「抽象名詞に近い」ものだと述べている⁵⁾が、まさしくその通りであろう。

事実、先の引用箇所の中で、エンマが、パリとは「なんと大きな感じのする名」と言い、その名を「繰り返しては楽しんだ」という一節には、具体的なパリとはほとんど無縁な所に位置付けられたパリ、言語空間内部だけで存在し、エンマを魅了しているパリ、それゆえに、どんな夢をも含んでいるパリ、何もかもが溢れるように存在しているパリ……という状況をよく示しているのではないかと思う。

かくして、エンマは、確かにその一方で、パリの地図を買い、新聞や雑誌などを購入しては、実際のパリでの生活を夢想する。だが、その内容はと言えば、《tables ovales couvertes d'un tapis de velours à crêpines d'or》「金総つきのピロードをかけた卵形テーブル」、あるいは《point d'Angleterre au bas de leur jupon》(共にp.60)「ベチコートに付けられたイギリス・レース」というように、あまりにも鮮明に夢見られた細部の連続なのである。ここには、将来の生活を夢想するにあさわしい全体像が徹底して欠けている。言い換えれば、その夢想の内容があまりにも恣意的であまりにも漠然としているのである。

それゆえ、それは、近い将来、フランスの首都であるパリに赴き、そこで実際に生活しては、「今、ここ」にはない幸福や情熱を実現しようとするといった性質のもの、つまり、(最終的にそれが実現できるか否かは別にしても)ある具体的な到達地点としての「夢＝目標」というものではないだろう。いわば「夢のための夢」とでも言うべき、強度に満ちた断片的イメージからなる自律的な性格の強いものであって、時には、(夢を見る)主体としてのエンマがあたかも不在であるかのように描かれることさえあるものなのだ。

例えば、《Emma n'en apercevait que deux ou trois qui lui cachaient tous les autres [...]》(p.60)

「エンマにはそのうちの二、三しか見ることができなかった」で始まる、長い夢の描写においては、この引用箇所に見られる《Emma n'en apercevait [...]》を最後に、夢見る主体であるエンマがまったく消えてしまい、再びエンマが登場するのは、語り手自身による彼女の心理分析の場なのである。その間、夢はあたかも自律した夢空間とでも言うべき様相を呈しているのである。ここには、夢がエンマという主体に従属していることを示す「彼女は見た」とか「彼女の眼には(...)と映った」といった言葉がまったく欠けているのだ。

C. 夢に先行する、現実への視線

エンマにとっての「パリへの夢」とは、それゆえ、逆に言えば、目の前にあり、自分をすっかり取り巻いている現実の生を否定するものとして、しかもそれだけのためのものとして存在していると言えるのではないだろうか。エンマの性質のひとつとして、フローベールによって書き加えられた次のような一節は、このことを適切に物語っているように思われる。

Plus les choses, d'ailleurs, étaient voisines, plus sa pensée s'en détournait. (p.60)

「もっとも、物が手近にあればあるほど、エンマの考えはその物からそれて行った。」

したがって、エンマが、

Tout ce qui l'entourait immédiatement, campagne ennuyeuse, petits bourgeois imbéciles, médiocrité de l'existence, lui semblait une exception dans le monde, un hasard particulier où elle se trouvait prise [...] (p.60) (c'est nous qui soulignons)

「彼女をじかに取り巻いているもの、退屈な田舎や、愚劣な小市民や、生活の凡庸さは、この世の中では一つの例外、特に自分だけがとらわれている一つの偶然だと思われた。」(傍点筆者)

と述懐するのも、はるかかなたにあるパリへの夢や憧れが、エンマの現実を退屈なものや凡庸なものに急に変えてしまうからではなく、先ず、現実がもつ退屈さや凡庸さへのはっきりとした認識があって、そうした現実を否定し拒絶するために、「パリへの夢」を見るからではないか。そして、その自律した夢空間とでも言うべき「パリへの夢」から再び自分の現実を見返す時に、その凡庸さがいっそう募るから、こうした現実は「この世の中では一つの例外、特に自分だけがとらわれている一つの偶

然」だと思うのではないだろうか。

それゆえ、エンマの夢とは、現実に行先するものではなく、あくまで現実を否定するために、現実の対極にあるものとして、エンマが半ば意識的に設定するものと考えられるのである。それに第一、エンマは一般的に言われるように、ただ単に夢見がちな女性として描かれているのではなく、むしろ、明晰な認識力や判断力を備えた人物として描かれているように思われる。事実、フローベールは、エンマを、「感激に富むうちにも実際の心」の持主であると記している。この箇所は、原文テキストでは以下のようになっている。

Cet esprit, positif au milieu de ses enthousiasmes [...] (p.41)

この中にある《esprit positif》という語句は、フランス人の心には、「小説の中のように、夢見がちな」などを意味する《romanesque》という言葉とほとんど正反対の概念を生じさせるらしい。というのも、Bordas社のLogos辞典によれば、《romanesque—qui manque de réalisme et d'esprit positif》⁶⁾と記されているからだ。

さらにこの点に関して、おそらくその繁雑さのためであろう、フローベールによって決定稿から惜しくも削除されてしまった草稿の一節⁷⁾ははっきりと次のように述べている。

Ce côté réaliste de son esprit, qui s'était rebuté dans son enfance des contes de fées, qui s'était arrêté plus tard devant le mysticisme naïf, avait découvert le mensonge des morales en action, qui s'était lassé d'Atala, qui avait dédaigné comme bêtes les romans de Mme Cottin [...] (c'est nous qui soulignons)

「彼女の子供時代におとぎ話に尻込みさせ、のちになってからは素朴な神秘主義の前で足踏みさせてしまった、彼女の心の現実的な面は修身の嘘を見出し、さらには『アタラ』に厭きさせ、コタン夫人の小説を愚劣なものとして軽蔑さえさせたのであった。」(傍点筆者)

かくして、エンマは、現実が凡庸なるものであることを十分に認識しながらも、そうした現実を否定しようとするために、はるかかなたにある夢の国にすがりつくのである。また、こうした夢が自分の現在をすっかりバラ色に変えてくれるとは思っていないにも拘らず、それでもなお、自分を取り巻いている凡庸さを直視しないために、夢にすがりつくのである。

夢の内容が問題なのではない。先にも見たように、それは一面ではきわめてありふれた夢想であり、しばしば、遠近法を欠いた細部の連続からなるものである。ただ、夢が満たされる土地や人物が、「はるかかなた」にありさえすればよいのである。そうであれば、エンマは現実を逃れて何もかもそこに投げ入れることができるのである。子爵と「パリへの夢」がそうであったように、第2部以降に登場するレオン(Léon)もロドルフ(Rodolphe)も皆そのような夢の機能を果すであろう。

もちろん、「はるかかなた」とは、単に空間的な距離ばかりを意味するとは限らない。ヴォービュサルでの舞踏会の場合のように、過去に生じた出来事への思い出という意味での時間的な距離をも意味している。実際には、むしろ、この両者が混在しあっていると云った方が正確であろう。子爵の場合でも「パリへの夢」の場合でも、パリという空間的な隔たりは、それが舞踏会での華やかさという過去の思い出(時間的な隔たり)と緊密に結びついているからこそ、「はるかかなた」という夢想的な意識が生じるのである。

ところで、こうした夢を介在させてまでも眼をそらしたがつていた現実とは、さしあたって、エンマとは逆に、田舎の生活にすっかり満足しているらしいシャルルによって代表されるであろう。こうした二人の間の意識の相違を見事に浮き上がらせているのは、第1部第9章の次のような箇所である。

[...] elle [=Emma] époussetait son étagère, se regardait dans la glace, prenait un livre, puis, rêvant entre les lignes, le laissait tomber sur ses genoux. Elle avait envie de faire des voyages ou de retourner vivre à son couvent. Elle souhaitait à la fois mourir et habiter Paris.

Charles, à la neige à la pluie, chevauchait par les chemins de traverse. Il mangeait des omelettes sur la table des fermes, entraînait son bras dans des lits humides, recevait au visage le jet tiède des saignées, écoutait des râles, examinait des cuvettes, retroussait bien du linge sale [...] (p.62)

「彼女(エンマ)は、本棚の塵を払い、姿見に姿を映し、一冊の本を取り出し、そこで行間に夢を追うては、本をはらりと膝に落とした。旅がしなくなったり、修道院へ帰りなくなったりした。死にたくもあり、パリに行き住みたくもあった。

シャルルは雪の日も雨の日も間道を通って馬を駆った。百姓家の食卓でオムレツを食い、じめじめした寝床へ腕を差入れ、刺絡で取った悪血の生温いしびきを受け、呻き声を聞いたり、金盥のなかを検査したり、汚れた下着

を捲り挙げたりした。]

この一節には、いまさら説明を加える必要がないであろう。雪の日も雨の日も規則正しく自分の仕事を果すシャルル。彼は、まさしく平板で退屈な田舎の生活にしっかりと根を下ろしている存在である。フローベールは、事実、このようなシャルルを、エンマの都合でトストを離れなければならない時、次のように述べている。

Il en coûtait à Charles d'abandonner Tostes après quatre ans de séjour et au moment où il commençait à s'y poser. (p.69)

「四年間も居を構えて、《やっと根を下ろしかかった》頃にトストを見捨てるのは、シャルルにとっては痛手であった。」

これに比べて、エンマは、先の引用文にあるように、こうした現実から逃げ出すことしか考えていない。もちろん、受動的な存在であるエンマは、すぐさま、それを実際の行動に移すわけではない。

D. 「現実」の奥に存在するもの

ところで、これほどまでにエンマが逃げ出したいと切望していた現実とは、実際のところ、一体、何だったのだろうか。例えば、オメー (Homais) に象徴されるような、田舎のブチ・ブルジョワたちの生活をすっかり覆っている「凡庸さ」とか「卑俗さ」とかいうもののなかだろうか。おそらく、そうであろう。しかし、それだけではないのではないか。というのも、そうしたものの奥にある、何かやりきれないもの、言ってみれば、存在論的なやりきれなさ、サルトルの嘔吐感に近いものがエンマにとってもっとも問題だったのではないかと思うからである。

エーリッヒ・アウエルバッハ (Erich Auerbach) は、この点に関して、「この小説が表現しているのは、一つの出口のない人生だ。(中略) その表面的な動きは、単なる空虚ないとなみにすぎないが、その下には、ほとんど感知できない、大きなたえまない別の動きがあって、政治、経済、社会の根柢は比較的固定していながら、同時に耐えられない程はりつめているのである。」⁹⁾と述べている。

こうしたやりきれなさが最もよく表されている箇所は、第2部第5章冒頭において、近くの荒廃した工場見物の際に、エンマが見たシャルルの姿であろう。この箇所は、フローベールが愛用した自由間接話法 (style indirect libre)⁹⁾で、以下のように書かれている。

Emma, [...] regardait le disque du soleil irradiant au loin, dans la brume, sa pâleur éblouissante; mais elle tourna la tête: Charles était là. Il avait sa casquette enfoncée sur ses sourcils, et ses deux grosses lèvres tremblotaient [...] (p.104)

「エンマは、はるか霧の中にまばゆい青白い光を発している太陽の円盤を眺めていた。しかし振り向くとそこにシャルルがいた。鳥打帽を目深にかぶり、厚い唇をブルブルと震わせていた。」

アルベール・チボーデ (Albert Thibaudet) はこの箇所に見事な説明を加えている。

太陽の円盤から、彼女の目はこの黒く鈍い塊の上に落ちていく。この《deux points》ほど、深い意味のこもった区切り、また『そこにシャルルがいた』という句に使われた単純時の動詞 (simple auxiliaire) ほど表現豊かな動詞はとうてい考えられない。彼は存在している。そして、彼の愚劣、彼の罪はまさしくこの存在しているということに尽きるのだ。¹⁰⁾

まさしくその通りであろう。《deux points》という区切りと同時に、短く単刀直入に置かれた《Charles était là》「そこにシャルルがいた」という文は、明らかにエンマがシャルルを通して、いわば生の現実、奇怪で醜悪な生の現実と向かい合ってしまった衝撃を伝えているのではなからうか。そして、「厚い唇をブルブルと震わせていた」という一節は、単にシャルルの痴愚的な下品さを表しているだけではなく、エンマの心が受けた、そうした衝撃を見事に表現しているように思う。つまり、「ブルブルと震わせていた」のは、シャルルの唇ではなく、むしろ、シャルルの唇の細かい震えまで凝視しているエンマの方だったのではないか。この箇所が、自由間接話法ではなく、仮に、

[...] mais elle tourna la tête; elle remarquait que Charles était là. Elle remarquait qu'il avait sa casquette enfoncée sur ses sourcils, et que ses deux grosses lèvres tremblotaient [...]

「しかし、彼女 (エンマ) は、振り向くとそこにシャルルがいることに気づいた。(シャルルが) 鳥打帽を目深にかぶり、厚い唇をブルブルと震わせていることにエンマは気がついた。」

という間接話法の形で文章が綴られていたならば、チボーデにしてもそれほど重要さを認めなかっただろう。自由間接話法を使うことによって、この箇所は、エンマの

視点から見られたシャルルの愚劣さという以上に、語り手を経てフローベールが見たシャルル、そして、フローベールを通して私たち読者も見つたシャルル、つまり世界の真実としての、「シャルルが唇をブルブル震わせながらそこにいる」ことの醜悪さ、不気味さを私たちに表現し伝えているように思う。この後に、フローベールは、バルザック流の書き方をして、

[...] ses deux grosses lèvres tremblotaient, ce qui ajoutait à son visage quelque chose de stupide; son dos même, son dos tranquille était irritant à voir, et elle y trouvait étalée sur la redingote toute la platitude du personnage. (p.104) (c'est nous qui soulignons)

「(シャルルは) 厚い唇をブルブルと震わせていた。それが、彼の顔にどこか愚鈍なものを付け加えていた。彼の背中までが、落ち着きはらった背中までが見るも腹立たしかった。エンマはこのフロックコート¹⁾の背の上に、この人間の平凡さがすっかりさらけ出されているように思った。」(傍点筆者)

と付け加えているが、このように分析的に解釈されてしまったシャルルには、もはや先ほどまでの不気味さは存在しないだろう。あらゆる解釈を拒み、いや、何らかの解釈をするという余裕すら与えずに、即物的にそこに厳然として存在することで圧倒的な恐怖感を与えていたはずのシャルルは、エンマに解釈され、その結果、「愚鈍さ」と「平凡さ」というカテゴリーにおとしめられてしまう。それゆえに、これ以後は、こうしたカテゴリーのもとで、つまり「愚鈍なシャルル」として、シャルルはエンマに眺められることになるであろう。

E. 「夢の国」の住人たち—子爵、レオン、ロドルフ

エンマは、シャルルの愚劣さに腹を立て、シャルルを、さらにはシャルルに代表される愚劣な日常を、さらにはその根底にある存在論的な嫌悪感を否定しようとする。かくして、エンマは、先ず、子爵を通してバリの生活を夢見る。だが、その刺激も次第に消滅してしまうと、「未来は真つ暗な一筋の廊下」となって、何の変哲もない日々が続くことに、エンマは絶望する。先に論じたように、受身的な存在であるエンマには積極的に生活を変えようとする姿勢がまったく欠けている。彼女は何かが外部からやって来るのを空しく待つばかりである。それゆえ、エンマは、せめて、別な土地に移動することを望み、その新たな土地で幸福や情熱が得られないかと夢想することになる。¹⁰⁾

この期待の中で、エンマは、ヨンヴィル (Yonville)

という新たな土地に移動し、そこに登場してくるレオンに想いを寄せるのである。ただし、現実のレオンというよりは、子爵と同様に、いわば「かなたにある夢の国」に属しているレオンとしてであろう。

Débarrassée de la nourrice, Emma reprit le bras de M. Léon. Elle marcha rapidement pendant quelque temps; puis elle ralentit, et son regard qu'elle promenait devant elle rencontra l'épaule du jeune homme, dont la redingote avait un collet de velours noir. Ses cheveux châtain tombaient dessus, plats et bien peignés. Elle remarqua ses ongles, qui étaient plus longs qu'on ne les portait à Yonville. (p.96) (c'est nous qui soulignons)

「乳母を追い払ったエンマは、レオンの腕を取った。しばらくは足早に歩いた。やがて足を緩めると、前を見ていた視線がふと青年の肩にとまった。青年のフロックには黒ビロードの襟がついていた。栗色の髪の毛が、ぴったりときれいに梳かれてその上に垂れていた。彼女はレオンの爪に気がついた。それは、ヨンヴィルの人たちの爪よりは長かった。」(傍点筆者)

この引用箇所では、「前を見ていた視線がふと青年の肩にとまった」という一節が重要である。それまで、シャルルのブルブル震えていた唇を直視するのを避けて、「はるかかなた」のバリやそこにいると想像している子爵に向けられていたエンマの視線が、この時、いわば、急に目の前にいるレオンの肩にとまったのである。そして、エンマは、レオンがヨンヴィルにいる他の人たち(もちろん、この中にシャルルもいる)とは異なることに気がつき始める。

「(レオンの爪) は、ヨンヴィルの人たちの爪よりは長かった。」

爪ばかりではない。レオンだけが、あたかもこの土地に縛りつけられているように暮らしている人々の中にあつて、ただひとり、他所に自由に移動する可能性を有していることにも気がつくのだ。

そもそも、エンマにとって、他の土地に自由に移動することができるということは、《parcourir les passions et les pays, traverser les obstacles, mordre aux bonheurs les plus lointains》(P.91)「いろいろの欲望や国々を駆け巡り、邪魔なものを乗り切ってどんなに遠い幸福でもつかむ」ことができることであり、まさしく自分が渴望していた「はるかかなた」の国々へ自由に行けるということを示している。それゆえ、これは、エ

ンマにとって幸福の条件そのものなのである。だからこそ、田舎の土地に「根を下ろしている」シャルルに強い嫌悪を覚えるのであり、また、そうした態度を典型的に表しているシャルルの次のような姿に腹立たしさを感じるのである。

[...] au bout de cinq minutes il s'endormait; et il restait là, le menton sur ses deux mains, et les cheveux étalés comme une crinière jusqu'au pied de la lampe. (p.63) (c'est nous qui soulignons)

「ほんの五分もすると、居眠りを始めた。そして、顎を両手の上にのせ、髪の毛をまるでたてがみのようにランブの台の辺りまでなびかせたまま動かなかった。」

(傍点筆者)

このように考えると、レオンとエンマが最初に交わす言葉が次のようなものであったことはきわめて興味深いであろう。

—Il est vrai, répondit Emma; mais le dérangement m'amuse toujours; j'aime à changer de place.

—C'est une chose si maussade, soupira le clerc [=Léon], que de vivre cloué aux mêmes endroits! (p.82)

「『ほんと』とエンマは答えた。『でも、私、動くのはかえって面白いんです。場所をかえるのが好きですから。』

『同じところに釘づけにされて暮らすのはまったくうっとうしいものですね!』と書記(レオン)が溜息をついた。』

事実、レオンだけがひとり頻繁に、ヨンヴィルを離れて動き回っている。

Enfin Charles [...] le [=Léon] pria de voir lui-même à Rouen quels pouvaient être les prix d'un beau daguerréotype [...]; ces démarches ne devaient pas embarrasser M.Léon, puisqu'il allait à la ville toutes les semaines, à peu près. (p.120)

(c'est nous qui soulignons)

「シャルルは、上等の銀版写真はいくらするのか、じきじきルーアンへ行って見てほしいとレオンに頼んだ。(...) レオンは、毎週のように町へ出かけるのだから、そんな交渉も迷惑になるまい。」(傍点筆者)

このような意識下の準備がエンマにおいて次第になされ、レオンは、パリにいるはずの子爵に取って代わる。かく

して、エンマはレオンへの愛情をはっきりと認めるようになる。

Elle était amoureuse de Léon, et elle recherchait la solitude, afin de pouvoir plus à l'aise se délecter en son image. (p.110)

「彼女はレオンに恋していた。そして、心ゆくばかり彼の面影を楽しむために孤独を求めた。」

この時、直ぐにエンマは、「レオンとどこか遠い所へ逃げて行きたいという誘惑」に駆られてしまう。

Des tentations la prenaient de s'enfuir avec Léon, quelque part, bien loin [...] (p.112)

「レオンとどこか遠い所へ逃げて行きたいという誘惑がエンマに起こった。」

どこか遠い所、それはまさしく、現実のどこかというのではなく「はるかかなた」に漠然と設定された夢の国であろう。しかし、ここでも、何よりも先ず、エンマは、この息苦しい「今、ここ」としての現実からの脱出のみを強く願っているのだ。

だが、実際には、エンマがあれほど憧れた「はるかかなた」のバリへ、レオンひとりが立ち去ってしまい、エンマは相変らず「現実」の中に取り残されてしまう。その結果、舞踏会の場合と同様に、エンマは、再び、レオンによって生じた事件を(ロドルフという新たな石がエンマの所に投げ込まれるまで)ただひたすら反芻する日々となるであろう。

Dès lors, ce souvenir de Léon fut comme le centre de son ennui [...] (p.127)

「それからというもの、レオンの思い出は彼女の哀愁の、いわば中心となった。」

そして、レオンが子爵に取って代わったように、ロドルフは、レオンの後に登場しては、彼に取って代わるであろう。このことは、エンマの内部では、子爵もレオンもロドルフもみな同じ役割しか果たしていないことを意味している。つまり、エンマの視線を、たとえ一時的にせよ、現実からそらし、現実の向こうに投げかけさせるための手段以外の何物でもないのである。ただ、彼等がそうした存在になるためには、レオンについて詳しく述べたように、他所に移動する自由を十分に有していることが必要となる。というのも、明らかに、エンマは、夢を通して、比喩的にも、実際的にも、現実からの脱出のみを渴望しているからである。かくして、エンマが、子爵、

レオン、ロドルフを次のように三人並べて思い浮かべるのもきわめて当然のことである。

Mais, dans ce geste qu'elle fit en se cambrant sur sa chaise, elle aperçut au loin, tout au fond de l'horizon, la vieille diligence *l'Hirondelle*, qui descendait lentement la côte des Leux, entraînant après soi un long panache de poussière. C'était dans cette voiture jaune que Léon, si souvent, était revenu vers elle; et par cette route là-bas qu'il était parti pour toujours! Elle crut le voir en face, à sa fenêtre; puis tout se confondit [...]; il lui sembla qu'elle tournait encore dans la valse, sous le feu des lustres, au bras du vicomte, et que Léon n'était pas loin, qui allait venir...et cependant elle sentait toujours la tête de Rodolphe à côté d'elle. (p.151) (c'est nous qui soulignons)

「しかし、椅子にそり返りながら、そうして眼を細めた途端、はるか地平の果てに古ぼけた乗合馬車の『つばめ』が見えた。それは長い土煙を引きながら、ゆるやかにルウの丘を降りてきた。レオンがあんなに幾度も彼女の方へ帰ってきたのはあの黄色い馬車だった。そして、レオンが永久に去ってしまったのは向こうのあの街道だった！エンマは向かいの窓に彼の姿を見るような気がした。すると、なにかもかと一緒にになった(...)。子爵の腕に抱かれながら光り輝くシャンデリアの下に今ワルツを踊っているような、またレオンが近くにいる今にもやって来るような...。それでいてやはりロドルフの顔を間近に感じていた。」(傍点筆者)

F. まとめ

エンマにとっては、夢それ自体が問題なのではなく、夢を通して、自分を取り巻く現実からの逃避あるいは脱出だけが問題なのである。したがって、エンマの夢を委ねる相手は、いわば誰でもよいのだ。ただ、夢を委ねるだけの存在であればよいのだ。プーレの比喻を再び借りれば、「投げ込まれた石」になるだけの存在であればよいということになるだろう。だから、子爵とレオンとロドルフが混同されたとしても何ら驚くに値しない。あのシャルルだって、下に引用した箇所にも明かなように、娘時代のエンマにとっては、幸福や情熱に満ち溢れた「はるかかなた」の夢の国に連れて行ってくれると思われた存在なのだから。

[...] l'irritation causée par la présence de cet homme [=Charles], avait suffi à lui faire croire qu'elle [=Emma] possédait enfin cette passion

merveilleuse qui jusqu'alors s'était tenue comme un grand oiseau au plumage rose planant dans la splendeur des ciels poétiques [...] (P.41)

「シャルルという男の存在による刺激、ただそれだけで、エンマは、今まで大きなバラ色の鳥のように輝かしい詩の天空にのみ翔っていたあの素晴らしい情熱を、いよいよわがものにしたいのだと思い込んだ。」

註

(1) 当論文で使用する「夢」もしくは「夢想」という言葉について、ひとこと注意しておきたい。ここでは、とりあえず、現前するものの知覚、すなわち現実中存在するものをその場で知覚する以外の行為を指すものとする。したがって、そこには、想起としての思い出も入れば、いわゆる夢や白昼夢も入るであろうし、また、幻覚や憧憬といったものも入るであろう。しかし、その多くは、過去を想起する「思い出」と近い将来に向けられた「夢想」とに分類されるであろう。

(2) ジャン・ルーセ (Jean Rousset) は、そのフローベール論の中で、わざわざ「窓と俯瞰」という章を設け、フローベールの作中人物たちにとって、窓とは恰好の身の置き所であり、彼等は日々、窓辺にすわって何ごとかが起こるのを待ち望んでいると指摘している。

Jean Rousset, *Forme et Signification, essais sur les structures littéraires de Corneille à Claudel*, José Corti, 1964, p.122-126.

(3) Georges Poulet, *Les Métamorphoses du Cercle*, Flammarion, Collection «Champs», 1979, p.393.

(4) ここで「子爵」と呼ばれている人物が本当に子爵であるかどうかは曖昧なままである。原文テキスト54頁にあるように、通称「子爵」と呼ばれているだけである。また、「絹の葉巻入れ」も、この「子爵」が落としたものに相違ないとエンマが勝手に決めつけている過ぎないのである。(原文テキスト56-57頁を参照せよ)

(5) Françoise Gaillard, *L'En-seignement du réel (ou la nécessaire écriture de la répétition)*, dans *La Production du Sens chez Flaubert*, Union Générale d'Édition, Collection «10/18», 1975, p.204-205.

(6) 《Logos》Grand Dictionnaire de la Langue Française, Bordas, 1977, t.3, p.2679.

(7) Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, Nouvelle version précédée des scénarios inédits, Textes établis sur les manuscrits de Rouen par J. Pommier et G. Leleu, José Corti, 1949, p.190.

尚、この草稿、いわゆる『ポミエ＝ルー版』とは、

実際の草稿そのものというよりも、編者たちが、現存している草稿の数段階の推敲を整理した上で作成した、いわば理念上のプレオリジナル版のことである。したがって、この『ボミエ＝ルルー版』と私たちがいま使用している決定稿との間には、確かに一種の断絶がある。しかし、J. P. リシャール (Jean-Pierre Richard) がその素晴らしいフローベール論を書くにあたってこの版を縦横無尽に使用したように、私たちも、『ボミエ＝ルルー版』が、さまざまな理由から決定稿ではその姿を充分に見せていない、いわばもうひとりのフローベール、生のフローベールを知る上で欠かせないテキストであると判断したので今後もしばしば使用することになろう。

(8) エーリッヒ・アウエルパッハ (Erich Auerbach), 『ミメーシス』 (篠田一士・川村二郎訳), [全2冊], 筑摩書房, 《筑摩叢書76》, 1967年, 下巻, 244-247頁。

(9) 自由間接話法に関しては、筆者のフローベール論全体の第四章「フローベールと『ドン・キホーテ』」において詳しく触れる予定である。

(10) Albert Thibaudet, *Gustave Flaubert*, Gallimard, 1935, p.108.

(11) エンマにおける「新たな土地への移動」という主題については、次号掲載予定の第一章第三節において、説話論的な変容との関係から詳しく言及する予定である。